

主 文
原告の被告人の有罪部分を破棄する。
本件を大津地方裁判所に差し戻しする。

理 由

当裁判所は先づ職権で原告の擬律の当否を検するに
第一 原告は第一事実として、被告人はAと共謀の上、政府の免許
を受けないで製造されたものであることを知りながら、酒税法第六十二條第一項第
人に譲渡した事実を認定し、これに対し刑法第六十條、酒税法第六十二條第一項第
三號、第五十三條、罰金等臨時措置法第二條を適用し、各個人の譲渡を一年以下
金百二十五円乃至千円（千円は三個のみで他は千円未満）の言渡をしてみないか
ら、その寡
て酒税法第六十二條には同法第五十三條の規定に違反した者は一年以下罰金
十萬元以下の罰金に処すとあるのみで、罰金の寡額を規定してみないから、その寡
額は罰金等臨時措置法第二條によるべきところ、同條第一項には罰金千円以上と規定
する、但し、これを減輕する場合に於ては、千円以下に下げることができると規定
し、罰金は原則として千円以上なることを明示して居り、これを減輕する場合に千
円以下に下げることができるとなつて居るが、この場合といえども無制限に下
げ得るものではなくて、それぞれ法令の規定に従ふべき場合に於ても、二百五十
六十六條により法律上の減輕と酌量減輕とを為し得べき場合に於ても、二百五十
六十六條に下げることとはできないのである。然るところ酒税法第六十六條の規定によ
れば、本件の罪等には刑法第四十八條第二項、第六十三條及び第六十六條の規定を適
用しないことになつて居るから、酌量減輕はできないし、他に法律上の減輕事由の
ない本件においては一個の行為につき千円を下りたる罰金を以ては処断できない場
合である。故に原告の公判に於ける検事の千円未満の罰金の所謂求刑も失当であると
共に、千円未満の罰金を言渡した原告は法令に違反した誤があり、この誤は判決
に影響を及ぼすことが明らかである。

第二 次に原告は第二事実として、被告人はAと共謀の上、昭和二十六年三月
十日頃政府の免許を受けないで四斗甕を容器として蒸米約七升、米麴約七升、水約
一斗五升を原料として仕込み醱酵させてその頃アルコール分約十二度の清酒約四
斗ができると（一）内約三斗はそのまゝとして清酒約三斗を製造し（二）内約一
斗の醪を同月十三、四日頃濾過してアルコール分約十二度の清酒約七升を製造した
との事実を認定し、右（一）と（二）とは各独立した犯罪とし、夫々刑法第六十條
酒税法第六十條第一項罰金等臨時措置法第二條を適用し、（一）の点につき罰金五
千円（二）の点につき罰金一万五千円の言渡をしている。しかる原告の証示の証
によれば、本件は被告人は政府の免許を受けないで清酒を製造する目的で、右判示
の如く一個の甕に一回に原料の仕込をして醪約四斗を製造し、その醪の一部約一斗
を濾過して清酒約七升を造り、残醪約三斗でも清酒を造る目的であるところ、そ
の運びに至らない前に検挙せらるるに至つたところ、事實関係にあることが明らか
あるから、斯る事實関係にある場合に於て被告人の醪及び清酒の密造が原告の認定
の如く二個の独立した犯罪を成立するものか否かを検討する必要がある。被告人が
最初製造した醪約四斗は一個の甕に一回仕込み同時にできたもの即ち一個の行為に
より生じた一団のものであるが、その内の一部を濾過して清酒を造つたに過ぎな
い。今若し被告人が残部の約三斗の醪を濾過して清酒を製造した際に発覚したもの
としたら最初の清酒の製造と、残醪による清酒の製造とを二個の密造としないで包
括的に一個の犯罪が成立するものとすること何人も異存はないであろう。又若し
醪約四斗ができただけで未だ少しも清酒を製造しない間に発覚したとしたら醪約四
斗の密造として一個の犯罪を認めることであるとするとも亦明らかであろう。然
らばその醪の一部から清酒を製造したからと云つて、この場合に二個の犯罪が成立
するとせば彼此權衡が保てない。

又酒税法第十四條第十六條の規定によれば、酒類又は醪を製造しようとするもの
はそれぞれ政府の免許を受けることが必要であつて、只酒類製造の免許を受けたも
のはその外に醪製造の免許を受けなくともその酒類製造用の醪を製造することがで
きることになつて居る。

而して醪は清酒製造の過程に於ける生成物であるから無免許にて清酒を製造した
罪の内には、その原料なる醪の免許製造罪は当然包含せらるること勿論であるが、
本件の如く原料たる醪の一部が残つて居る場合にこの醪の製造の点を如何に取扱う
か、原告の如く清酒製造の外醪製造の独立罪として取扱うことの不合理たること
前説明のとおりであるが、さりとてこの醪製造を不問に附することは酒税法制定の
趣意に鑑みてできない。

〈要旨〉酒税法第六十条第一項には「免許ヲ受ケズシテ酒類、酒母又ハ醪ヲ製造シクル者ハ云々」と規定してあつて、〈要旨〉酒類と醪とを同様に取扱い同一法条に規定しているところよりすれば、この場合に於ては醪と清酒とを製造した同条項該当の一罪と見るのが妥当であつて、本件に於ては未だ濾過するところまで行かなかつた醪約三斗と醪約一斗を濾過して製造した清酒約七升とを密造したとの一罪を構成するものと謂うべきである。

大審院の古い判例（明治四十二年（れ）第一六一一号同年十二月七日第一刑事部判決、刑録第十五輯第一七四四頁）によれば、酒類製造の免許を受けずに清酒製造の目的を以て醪若干を造り、その内幾部より清酒を製造し残醪は清酒製造前収税官吏に差押へられたと云う本件と同様な事実関係にある場合に於てその醪と清酒の密造は手段結果の関係あり刑法第五十四条を適用する場合であると判示している。然しその当時に於ては酒に関しては酒税法に、醪に関しては酒母醪及麴取締法に夫々規定し、法条及び刑罰を異にしていたのであるが、本件犯行当時に於ては酒税法に一括規定しているのであるから、右大審院の判例と同一に論ずる必要もない。

仮りに大審院の見解に従うとしても刑法第五十四条を適用して処断するものであるから、原判決の如く独立せる二罪とすることはできない。

（裁判長判事 岡利裕 判事 國政真男 判事 石丸弘衛）